

## 広島市植物公園

## Hiroshima Botanical Garden

日本・広島

Hiroshima, Japan

## 世羅徹哉

広島市植物公園長



「この10年間、グリーンレガシーひろしまは、被爆樹木の種子を国内外に届けるだけでなく、届けた施設のネットワーク構築、被爆樹木に関する科学的調査への協力など、様々な活動を行ってこられました。広

島市植物公園が、その一助となれたことを、大変うれしく思います。被爆樹木二世たちが、各地で根を張り、枝葉を広げていくことを願っています。」

## 濱谷修一

広島市植物公園管理課課長補佐



「発足10年、おめでとうございます。世界中の国の方々と種子のやり取りをしたり、何人かの方には実際に会って話をしたりして、世界の広さを感じた一方で、全く別の機会に知り合った方とグリーンレガシーの活動で連絡を取ることがあったりするなど、世界の狭さも感じることができ、貴重な経験をさせていただいています。コロナウイルスの影響で、今現在、活動がやや停滞していますが、世界での感染の収まりとともに、再び活発になる事を期待しています。」

広島市植物公園は西日本の広島県広島市佐伯区の瀬戸内海に面した丘の上にあり、1976年11月3日に開園しました。当園はGLHが世界中に種を送り届けるための拠点です。



世羅さんと濱谷さんご自身のことや現在の広島市植物公園での役割について教えてください。ご自身が植物に携わる仕事を選ばれるにあたり、きっかけとなったことはありますか？

(世羅)広島市出身です。郊外の田舎で育ったこともあり、自然に野生植物に興味を持つようになりました。広島大学理学部在学中に、日本の小さな野生ランを材料に、植物の分布や系統進化の研究を行っていたことがきっかけで広島市植物公園に勤務することになりました。1983年に赴任して以来、ランを始め様々な植物の栽培・管理や展示の業務を担当してきました。現在は、植物公園長として植物公園の運営全般に携わっています。

(濱谷)兵庫県出身です。大阪府内の大学を卒業後、平成3年から広島市植物公園に勤務を始めました。身体を動かすことが好きなので、そのような仕事を探していたところ、偶然に広島市植物公園の採用情報を見つけ、応募しました。現在は管理課課長補佐として企画広報係を担当しています。

広島市植物公園の歴史-組織の概要や、いつ、どのような経緯で作られたかを教えてください。

(世羅)広島市植物公園は、1976年11月3日に、当時は五日市町だった現在の地に広島市飛び地の形で設立されました。設立の目的は、市民の憩いの場として広く市民に親しまれ、自然観察の場、植物に関する知識の普及と自然保護の推進をはかる社会教育の場であることです。また、特色ある植物公園とするため、保有・展示する植物の中心をランとし、初代園長にラン科植物の専門家である唐澤耕司氏を招へいしました。ランを中心としたのには、地元五日市町が全国で初めてデンドロビウムの商業生産を始めた場所であったということが理由としてあったそうです。

広島市立の施設ですが、現在は広島市の公益財団法人である広島市みどり生きもの協会が指定管理者として管理・運営しています。園内の植物の栽培・育成と展示を行う栽培・展示課と、行事の企画、施設の維持・管理や運営にかかわる諸事務を行う管理課の2課制で、約40名が働いています。

広島市植物公園さんにとっての被爆樹木にまつわる最初の出来事は何ですか？ 被爆樹木のネットワークの中で広島市植物公園さんがはたしている役割は何ですか？

(世羅)広島市が、市内の小中学校などに配布した被爆アオギリ二世の苗を、1987年から植物公園が育成したのが最初だと思われます。その後2005年に被爆60周年記念事業として「被爆樹木展」を開催しました。

被爆樹木の種子を世界に配布するネットワークの中では、送付先に適する種類を提案し、採取した種子を送付するまで保管し、場合によっては植物防疫などの手続きを経て種子を送付するという実務を担っています。

種子が広島植物公園に届いてから送付に至るまで、どのような手順で作業をすすめられたのでしょうか？

(濱谷)被爆樹木ワーキンググループメンバーが採取した種を、中心メンバーである樹木医の堀口さんが調整(果肉等の不要物を除去すること)されています。堀口さんから種子を受け取った後、園内の種子貯蔵庫(5℃に維持)内で種子を保管しています。

GLHから種の送付の依頼がくると、GLH事務局を通して必要な書類を用意してもらい、同時進行で発送する種子を小袋に入れ分けます。種子の状態によっては洗浄などを行い、検疫を通過できるように処理しています。

発送時に日本での検疫が必要な場合には、植物防疫所に申請をおこない、種子を持参して検疫を受けます。添付書類の作成などすべての作業が終わり次第、国際郵便(小型包装物)で発送する。

発送後は、種子の在庫状況を確認し、関係者に発送記録と共に情報提供しています。

今まで、世界中の多くの植物公園を含む様々な場所のGLHのパートナーに種を送ってきていたかと思いません。そのなかで得た経験や考え等を伺いたいと思います。

(濱谷)GLHが行っている種子の配布には、関わる人



GLH Committee Members

それぞれの熱い思いが寄せられていることを感じています。そのような思いに、植物園の一職員としてかかわるのは大変荷が重いです。私個人としては、植物の専門家として、希望された種子が先方にきちんと届くよう、必要な手続きを粛々とこなし、良い状態で種子を発送することだけに専念して取り組んでいるつもりです。

世羅さんは被爆樹木やGLHのキャンペーンに当初から関わっており、GLHのコミティグループのメンバーもされていました。そのきっかけや、キャンペーンに対する最初のころの思いについてお聞かせください。被爆樹木について結びついてこのネットワークの将来についてどのようにお考えですか？

(世羅)2012年にGLHの設立者であるアジミさんと渡部さん、そして当時のメンバーだった山田さんが植物公園にお出でになり、このプロジェクトへの協力を依頼されたことがきっかけです。広島に住み、植物に関わる者としてこのプロジェクトへ協力することの意義と必要性を感じました。世界中に平和の使者として被爆樹木二世を根付かせたいというアジミさんの熱意とネットワークには正直驚かされました。そして、被爆樹木に対する世界の人々の関心の高さには、大きな感銘を受けました。私は、植物学的に被爆樹木を見ますが、このプロジェクトで多くの人と関わったことで、被爆樹木が社会的に重要な存在であることを再認識しました。

樹木は長生きです。私たちの世代を超えて存在する被爆樹木のことを語り継ぐネットワークが広がっていけば良いと思います。

自然と平和 — 世界中でこの二つの結びつきが認識され始めています。植物公園が、平和や繁栄に貢献するために、将来的にどのような役割を果たしていくと思いますか？

(世羅)私には、植物公園や植物園が世界平和と繁栄に貢献するためのアイデアは、すぐには思い当たりません。ただ、動植物に限らず、自然的なものにある美しさ、多様性が持つ不思議さは、現実の社会で疲弊した私たちの心を癒してくれますし、人間らしい知的な好奇心をかきたててくれます。利用者がこのような感動を得ることができる施設であれば、それが些細な影響力であったとしても、私たちにとって必要な施設であるといえるのではないのでしょうか。

(濱谷)具体的に挙げるのは非常に難しいですが、何らかの役割を果たすことができればよいと考えています。

インタビュー：馬場裕子とルアン・ジュニー・シン